イェンデが《夢遊病の娘》で初役

今、世界を制覇しつつある南アフリカ出身の新進ソプラノ、プリティ・イェンデがベッリーニ《夢遊病の娘》題名役デビューにチューリヒ歌劇場を選んだ（演奏会形式）。所見日の5月12日は3回公演の千秋楽ということもあり、ヴェテランのイタリア人指揮者マウリツィオ・ベニーニはしっかり手綱を引きながらも自由に歌わせ、彼女の幸福オーラを全開させた。終幕のアリアのレチタティーヴォなど、間延びしすぎる部分もあったが、音楽的構築の完璧さよりも、歌手の心を自然に吐露させる自由を与えたのだろう。エルヴィーノを歌ったローレンス・ブラウンリーは美声だが、背の低さとアフリカ系アメリカ人の肌の色で、なかなか主役を射止めにくかったが、今回はアフリカ人のヒロインの横で朗々と熱く歌い上げた。テレーザ役の代役を急遽引き受けたフレデリカ・ブリレンバーグや、美声のカイル・ケテルセンが歌うロドルフォ伯爵の西洋人組、当歌劇場の専属である中国人ソプラノ、セン・グオ（リーザ）や韓国人イルド・ソング（アレッシオ）の東洋人組にも、人種の壁を超えた喝采が送られていた。プリティ・イェンデは柔らかな声と自然な歌唱、そして人柄が滲み出たステージマナーでスターの地位を確立した。

演奏会形式で上演された、チューリヒ歌劇場《夢遊病の娘》から。右、初役だったイェンデ
© Opernhaus Zürich / T+T Fotografie

その他、当歌劇場では4月末の初日以降、ロッシーニ《イタリアのトルコ人》の新演出が観客を楽しませている。父子共に永らくオペラに仕えるエンリケ・マッツォーラの指揮に、スイスの政党などの風刺も加えたジャン・フィリップ・グローガーの現代的演出で、トップ・スターはいなくても手堅いキャストで評判を呼んでいる。ロッシーニのオペラは、隅々に散りばめられた「音楽的遊び」を見逃すと、つまらないドタバタ劇になってしまうのだが、ドン・ジェローニオのレナート・ジローラミとプロスドーチモのピエトロ・スパニョーリら、イタリア人がスパイスを効かせていた。（5月10日所見）

今月の新演目は、ラモー作曲の《イポリートとアリシー》だ。チェンバリストとして名声を確立したエマニュエレ・ハイムの指揮、演出家のイェツケ・ミインセン共に、ウーマン・パワーを感じさせる自由なエネルギーの上に、狂信的な役が怖いほどはまるステファニー・ドゥストラックの演じるフェードルとアリシーを歌ったメリッサ・ブティの4人の女性が強い印象を残した。一歩引いた男性陣も、自由自在に歌える完璧な技術を持った題名役のシリル・デュボワ、ダンサーと互角に渡り合える容姿を備えたエドウィン・クロスリー・マーサー等が、ラ・シンティッラ管弦楽団の演奏と共に、高水準のバロック演奏を聴かせた。

ジンマンが再びトーンハレに

19年間首席指揮者を務めたデイヴィッド・ジンマンがチューリヒ・トーンハレ管弦楽団に帰って来た。現在は名誉指揮者である彼を再び見ようとする年配の聴衆があふれるなか登場したジンマンは、歩調に年齢を感じさせながらも、棒を振る姿は過ぎた年月を忘れさせた。ベートーヴェン《レオノーレ》序曲第2番」で華やかに開演した後、アンリ・デュティユー「チェロ協奏曲《遠かなる遠い世界へ》」では、現代曲のスペシャリスト、トゥルルス・モルクをソリストに迎え、豊満な響きのチェロと、完璧に掌握したわかりやすいジンマンの指揮に支えられた安心感のなか、ボードレールの没後100年を記念して作られたシネステーゼ（複合芸術）の世界に身を置いた。最後は明快なハイドン「交響曲第90番」で締めくくられた。

ICMA受賞者ガラ・コンサート

2011年に創設されたインターナショナル・クラシカル・ミュージック・アワード（ICMA）の授賞式が、今年は初めてスイスで行われた。

5月10日、ルツェルンのカルチャー・コングレスセンターで催されたガラ・コンサートでは、ローレンス・フォスター率いるルツェルン交響楽団をバックに、オーディオ&ヴィデオ部門受賞者のシュシャヌ・シラノシアン（vn）とクリストフ・ヘーシュ（vc）が温かい響きでブラームス「二重協奏曲」イ短調を聴かせた後、ヤング・アーティスト賞のマトコ・スモルチッチがウェーバー「ファゴット協奏曲」へ長調で超絶技巧を披露した。オーケストラが選ぶ最優秀賞はスティーヴン・ワーツが選ばれ、サラサーテ《カルメン幻想曲》で熱く競演し、アーティスト・オブ・ザ・イヤーを授賞されたハヴィエル・ペリアネスはグリーグ「ピアノ協奏曲」をドラマティックに演奏した。ライフタイム・アチーヴメント賞を贈られたネルソン・フレイレの奏でるショパン《舟歌》、室内楽部門受賞者のタベア・ツィンマーマンのヴィオラも心に沁み入った。ディスカヴァリー賞のエヴァ・ゲヴォルギャンはサン=サーンス「ピアノ協奏曲第2番」を選び、最後にベスト・コレクション賞受賞者のレイフ・セーゲルスタムが指揮台を譲られ、シベリウスの劇音楽《クオレマ》から〈悲しきワルツ〉を指揮した。